ストア派は内面的な幸福を説いたか？

近藤 智彦（北海道大学）

ストア派の幸福論は，西洋における――そして明治以降の日本における――哲学内外の幸福論の歴史のなかで，一つの伝統とも言える位置を占めてきた．そのことは例えば，かつて日本でも愛読されたカール・ヒルティ『幸福論』に，エピクテトス『提要』の全訳が収められていることからも示されるだろう．近年もまた，幸福論への新たな関心の高まりをうけて，いにしえのストア派の哲学者の知恵に学ぼうと謳う一般向けの書籍が続々と出版されている（日本語訳のあるものでは，William B. Irvine, *A Guide to the Good Life: The Ancient Art of Stoic Joy*, Oxford, 2009／ウィリアム・B・アーヴァイン，竹内和世訳『良き人生について：ローマの哲人に学ぶ生き方の知恵』白揚社，2013）．こうしたなかでストア派の中心的な教えとして注目されてきたのは，自己の欲求をコントロールすることで内面的な幸福を確保する技法である．他方で，このようなストア派の教えに対しては，否定的な評価も同時に与えられてきた．最近でもジョナサン・ハイトが，ストア派の教えは幸福の外的条件を蔑にしている点で，現代心理学研究の知見に照らして不十分であると指摘している（Jonathan Haidt, *The Happiness Hypothesis: Finding Modern Truth in Ancient Wisdom*, New York, 2006／ジョナサン・ハイト，藤澤隆史・藤澤玲子訳『しあわせ仮説：古代の知恵と現代科学の知恵』新曜社，2011）．こうした見方は，少なくともヘーゲルの哲学史にまで遡る伝統的なストア哲学解釈に沿うものと言える．しかし，これに対して本発表では，ストア派の本来の幸福論は以上のような理解には収まらないものであることを，主に現代英語圏哲学の幸福論と関連づけることも並行して試みながら，論じていきたい．

まず問題となるのは，ストア派が前提にしている「幸福」概念――ギリシア語で「エウダイモニアー」――の意味そのものであろう．現代の議論ではしばしば，「幸福（happiness）」という概念がポジティヴな心理状態という意味に限定される

一方，それとは異なる概念として「当人にとってよい生」といった規範的な意味での「幸福」—— well-being や welfare などの語があてられる——が区別される（主要な研究として，L. W. Sumner, *Welfare, Happiness, and Ethics*, Oxford, 1996, Daniel M. Haybron, *The Pursuit of Unhappiness: The Elusive Psychology of Well-Being*, Oxford, 2008）. この二分法に従うならば，古代哲学が主題とした「幸福（エウダイモニアー）」は後者にあたるはずであるが，ストア派の幸福論は伝統的解釈のもと，むしろ前者の意味での「幸福」をもたらす技法としてもっぱら受容されてきたのである. このことは，「自分が欲するとおりに行為する／生きる権能」と規定されるストア派の「自由」概念が，やはり伝統的には内面的な自由のこととして解釈されてきた事情と軌を一にすると考えられる. この点を，現代の「欲求充足説（desire-satisfaction theory）」および「人生満足説（life satisfaction theory）」をめぐる議論にも触れつつ，明らかにしたい. 現代における「幸福」概念の二分法については，それを固定的・客観的なものとみなすよりも，それ自体がいかなる理論的・社会的背景のもとで構築されたのかを検討することの方が，現代幸福論の依って立つ前提自体の批判的吟味を促すという意味では興味深い課題となるだろう——とりわけ，前者の「幸福（happiness）」概念の分化が，誰にでも同定可能であり（「幸福度」のように）測定可能ですらあるような心理状態の追求と連動しているのだとすれば（この点に関して古代哲学に肩入れした見解として，Richard Kraut, 'Two conceptions of happiness', *The Philosophical Review* 138（1979）, Martha C. Nussbaum, 'Who is the happy warrior? Philosophy, happiness research, and public policy', *International Review of Economics* 59（2012））.

古代の他の哲学者や学派と比較するならば，ストア派の倫理学の特徴は，能動的・外向的な活動・行為の意義を強調している点にある. クリュシッポスらは，エピクロス派などの快楽主義や，プラトン（主義）やアリストテレスに見られる「観想（テオーリアー）」を究極の幸福とみなす傾向を批判したが，これは道徳的な観点からなされたものというよりは，人生——人間にとっての「生きること」——は能動的・外向的な活動・行為に存するという見方によるものであった. これに類する論点を示しているものとして，ロバート・ノージックによる「経験機械」をめぐる議論が参照できるだろう（Robert Nozick, *Anarchy, State, and*

Utopia, New York, 1974／ロバート・ノージック，嶋津格訳『アナーキー・国家・ユートピア』木鐸社，1995）．活動・行為としての「生きること」のよさとして幸福を考えるにあたっては，ジュリア・アナスが強調するように，「生の状況（the circumstances of a life）」と，その状況と関わりつつ「生きること（the living of a life）」それ自体とをひとまず区別することが重要となる（Julia Annas, *Intelligent Virtue*, Oxford, 2011）．まさにこの論点を究極まで推し進めた試みとして，生の「目的（テロス）」に関するストア派の議論は評価できるだろう．ここで興味深いことに, 現代のいわゆる「客観的リスト説（objective list theory）」に対する批判と，外的状況は幸福に無関係とするストア派の議論とが，ある仕方で重なることを確認したい．最後に，このようなストア派の幸福論が，特定の形而上学的な世界観・人間観にどれだけ依拠したものなのか，言い換えれば，われわれの大多数にとってはもはや共有しえない幻想にすぎないかどうかを，「人生の意味」をめぐる現代の議論の枠組みのなかに位置づけること（の難しさ）を通して論じる（*cf.* Thaddeus Metz, *Meaning in Life: An Analytic Study*, Oxford, 2013）．